

社会学部のイメージは入学後半年でどう変わったのか

——社会学部一九九五年度新入生の生活と意識に関するパネル調査(1)——

1 はじめに

一橋大学では一九九六(平成八)年度より新しい「四年一貫カリキュラム」が全学的に実施されている。これは一橋大学における一連の大学改革の核心部分をなす施策の一つである。社会学部の「四年一貫」新カリキュラムの中には学部教育科目の導入科目として、従来からある「社会科学概論」に加えて、「社会研究の世界」と「社会研究の方法」が必修科目として配置された。

このうち「社会研究の世界」は、社会学部を構成する一三の科目区分(学問分野)を代表する教官が、その学問のオリエンテーションを内容とする講義を一回ずつ順

村田光二
藤島喜嗣

次行っていくものである。この授業科目は社会学部新入生全員が第一ゼミスターで履修する学部専門科目であり、コーディネーターを中心とした多数の担当教官によって構成されるという独特のものである。「社会研究の方法」は、新入生に社会科学の方法論への導入を行う授業科目で、メソドロジーとスキルの統合を目標としている。この授業も三名の担当者が数回ずつの講義を持ち回って実施するものだが、夏学期の「社会研究の世界」を受けて冬学期に実施されるものである。

こういった全学部的関与の必要な新設科目の導入は、うまく実行されるのであろうか。実施による教育的効果は認められるのであろうか。こういった経験的に検証され

るべき諸課題を念頭に置いて、社会学部では新カリキュラム全学導入の前に、この二つの授業科目を一九九五年に新設し、試行的に実施することを企図した。試行段階では「社会研究の世界」は「社会研究入門Ⅰ」、「社会研究の方法」は「社会研究入門Ⅱ」という授業科目名で実施された。また、必修科目としてでなく、選択科目として一年生のみを対象にして実施した。本論文の第一著者は、その「入門Ⅰ」（以下このように略記する）の一九九五年度実施のコーディネーターを務めた者である。

この試行的実施の機会を得て、「入門Ⅰ」導入の教育効果に関して実証的検討をすることも企画された。これは一橋大学社会学部が「国際化時代の生涯学習ニーズに対応するカリキュラム開発」プロジェクトに対して、平成六・七年度に文部省からカリキュラム改革調査研究経費として助成を受けて実施した調査研究の一環として実施可能となったものである。その中で「新設科目の教材作成と教育効果の実験的研究」と名づけて、ここで報告するようなパネル調査を実施したのである。なお、平成六年度中（一九九五年二月）には、その当時の一年生（本調査対象者の一つ上の学年）を対象に、ここで報告

するのと同様な予備調査を実施した。

「入門Ⅰ」の導入は、どういった影響を受講者たちに及ぼすのであろうか。講義要綱には授業の趣旨を「高度に専門化した社会科学の全貌を複眼的な視点から概観する」とうたっているが、その趣旨は達成されるのであろうか。このような問題意識から、新入学の四月と半年経過後の一一月に一年生全員を対象に調査を実施し、「入門Ⅰ」を受講したか否かを識別の指標の一つとして、パネルデータの分析を試みた。本論文で報告し議論するのは、その調査結果の一つである。

本論文は調査結果の第一報告であるが、結果の概要を報告するものではない。また、調査で調べられた質問項目（従属変数）のうち、「入門Ⅰ」の教育効果を見るのにふさわしいもの—例えば社会認識に関わる項目—を中心としたわけでもない。むしろ社会学部新入学生の実際とその半年後の変化に関して、著者たちが知りたいと考えている部分を中心に報告・検討することを試みた。これは紙数の制限と読者の関心を考慮に入れて選択した結果でもある。

実際には、一橋大学の生活の評価とその変化、社会学

部イメージとその変化、興味あるおよび将来専攻したい学問分野とその変化に関する質問への回答を分析し、その結果を報告したい。

2 調査の方法

【対象者】 一九九五年度(平成七年度)社会学部新入生二七二名全員が対象者であった。このうち第一回、第二回調査のいずれにも回答した者一六八名(六二%)がパネルデータ分析の対象者となった。

【調査手続き】 1、第一回調査 一九九五年度の社会学部新入生ガイダンス(四月五日実施)終了後、出席者全員を対象に「新入生の生活と意識に関する調査」と題したアンケート調査を実施した。調査用紙はその場で配布し、自記式で記入してもらった後に回収した。その結果二二三名からの回答が得られた(回収率八五%)。

2、第二回調査 半年経過後の一月初めに、同様の調査を学部一年生全員を対象に郵送によって配布し、返送してもらおうことよって実施した。その結果一七九名からの回答が得られた(回収率六六%)。

第一回と第二回とのデータの個人別対応をはかるため

に、いずれの調査にも小さな用紙をホチキス止めして、それに学籍番号を記入してもらった。調査用紙回収後すぐに学籍番号はランダムに設定された整理番号に置き換えられ、小さな用紙は削除した。その後のデータはすべて整理番号によって扱われ、対象者のプライバシーが保護されるよう十分注意を払った。学籍番号と整理番号の照合は本論文の第一著者だけが実施したが、第一著者は個別のデータのコーディング等の作業には一切携わらないこととした。

なお事前調査として一九九四年度の一年生全員二七一名を対象として一九九五年二月頃に行った調査は、これと同じ手続きによる郵送調査であった。これには一六八名から返送があった(回収率六二%)。

【調査項目】 調査用紙の質問は大別すると、A日常生活に関するもの、B社会認識・態度に関するもの、Cフェイス・シート項目から構成されていた。第一回調査のAに関する質問項目群の中には、①メディア接触、②課外活動、③メディア等の所有、④学問分野の興味等、⑤社会学部選択の理由、⑥大学生生活の評価、⑦社会学部イメージ、⑧他学部イメージ(商学部、経済学部、法学部の

いずれか一つをランダムに設定してあった)がほぼこの順に含まれていた。第二回調査では、高校時代の課外活動等のいくつかの質問を除いたが、③と④の間に、⑨大学施設の利用、⑩授業の履修の質問項目群を加えた。Bの認識・態度に関する質問項目群の中には、①メディア・情報に関する問題、②国際問題、③ジェンダーの問題、④環境問題、⑤政治有効性感覚に関する質問がこの順で含まれていた。特に②に関する質問が多かった。第二回調査でもこの構成は同じであったが、第一回調査結果で回答に分散のみられないいくつかの項目が削除され、追加項目はなかった。Cのフェイス・シートでは、第一回で、①年齢・性別、②留学生かどうか、③合格した入試の種類、④出身高校、⑤現役・浪人の別、⑥家庭の所在地、⑦現住所をこの順にたずねた。第二回調査では、①と⑦だけを繰り返してたずね、最後に夏休み中の旅行に関して回答を求めた。

第一回調査の用紙はB5版で一〇ページに及んだ。第二回調査では郵送の都合上縮小して印刷し、B5版四・五枚に収めた(実質的にはB5版九ページ分)。

3 大学生活の評価とその変化

本調査の質問項目は多岐にわたっていたが、ここではまず、一橋大学での生活に関する感想・評価およびその変化について検討してみたい。

これに関しては一四項目の質問を行った(表3-1参照)。「そう思う」から「そう思わない」まで五段階で回答された結果を因子分析してみると、学問・勉強に関する因子と社会性に関する因子が、二回の調査を通じて認められた。

第二回調査データの固有値一以上の因子の項目別負荷量を表3-1にした。ここでは三番目の因子として「単位の取りやすさ」が、他の項目から独立して抽出された。一橋大学に特有であるかどうかはわからないが、一橋大学を評価するとき欠かせない次元といえるだろう。もちろんこの点でも学生の評価は分かれているからこそ因子として抽出されたのである。また、第四因子はその他の項目をまとめたようなものであるが、あえて名づけると「利便性」因子といえるだろう。

第一回調査の時点でも二大因子が抽出された点は同じ

表3-1 一橋大学生活に関する感想・評価の質問項目および因子分析結果*1

項目\因子	学問・勉強	社会性	単位	利便性
(2) 幅広い知識が得られる**	.814	.121	-.016	.041
(3) 専門的な知識が得られる	.799	.206	-.161	-.068
(1) やってみたい学問ができる	.693	.193	.005	.221
(14) よき先生にめぐりあえる	.570	-.091	.124	.300
(5) 時代に即した新しい分野の勉強ができる	.553	.054	.356	-.147
(4) 資格取得に役立つ勉強ができる	.513	-.005	.309	-.425
(6) 自由に好きな勉強ができる	.467	.129	.412	.329
(9) クラブ・サークル活動が充実している	.018	.836	.064	-.034
(12) よき友人・先輩とめぐりあえる	.260	.774	-.024	.009
(8) 校風が自分にあっている	.063	.728	.139	-.252
(13) 異性の友人ができる	.099	.514	.470	-.105
(7) 単位がとりやすい	-.045	.106	.798	.067
(11) 通学に便利である	.059	.070	-.061	.677
(10) 海外留学するチャンスがある	.140	.022	.414	.591
寄与率	26.9%	12.9%	9.7%	8.1%

*1 表中の数字は因子負荷量

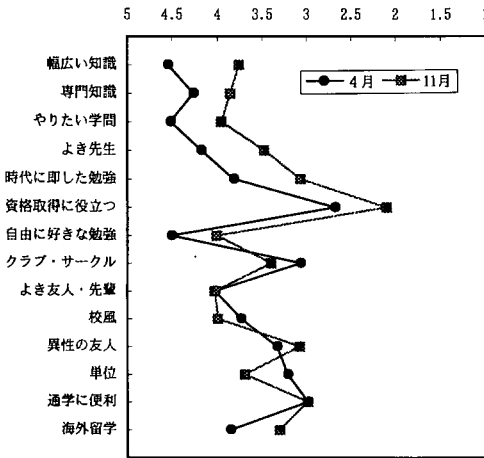
*2 各項目の前の数字は調査用紙上での質問の順番

であったが、抽出された三、五番目の因子はほとんど解
 釈不能な構成となっており、大学を評価する認知構造が
 未発達であったことがうかがわれる。特に「単位」の項
 目は第二因子に負荷量が最も高く、独立していなかった
 点から、先に指摘したこの項目からなる評価次元が入学
 後急速に発達したことが推測される。また、入学時点で
 は「異性」に関する項目が、「留学」に関する項目と負
 の相関を持って三番目の因子を構成していた点は興味深
 い。

各項目の評定の平均値を見ると、入学時点で最も高く
 大学生活を評価していた項目は、図3-1にあるように
 「幅広い知識が得られる」「やってみたい学問ができる」
 「自由に好きな勉強ができる」の三項目であった。これ
 に対して評価がやや低かった項目は「資格取得に役立つ
 勉強ができる」だけであった。その他の項目はすべて平
 均値が肯定的な側にあった(中立的な値は3であった)。
 半年経過後、学問・勉強に関する因子を構成している
 項目は、すべて否定的方向に評価が有意に変化した。評
 定値の変化の最も大きかった「幅広い知識」項目の段階
 別回答の変化を例示してみると、図3-2のようになっ

(29) 社会学部のイメージは入学後半年でどう変わったのか

図3-1 一橋大学生生活の評価とその変化



た。この図からも読みとれるように、否定的方向への変化の内実は、入学時に過度に高かった評価―おそらく一橋大学に対する強い期待を反映している―が現実的方向に修正されたものと考えられる。したがって半年後の評価の平均値でも、「資格取得」の項目を除けば、否定的な側になったものは一つもなかった。

もちろん、それでも新入学生が期待していたいくつかの側面を、一橋大学が裏切っていたことは事実であろう。

「利便性」を構成する「海外留学」に関する項目でも、大学を知るにつれて当初の評価が下がってきてしまっているのである。これらの点に関する反省を、教員スタッフとして忘れてはならない。

他方、社会性因子を構成する項目群では、「異性」に関する項目は否定的方向に評価値が変化したが、肯定的評価がほとんど変化しなかった「友人・先輩」の項目や、むしろ肯定的方向に変化した項目もあった。「クラブ・サークルが充実している」および「校風が自分にあっている」点に関する評価がそれである。このうち「クラブ・サークル」への質問の回答の変化を検討するため、段階別回答の比率の変化を図3-3に示した。この図から、入学当初でも肯定的に評価していた者が多かったが、その時判断を保留していた者も肯定的に「クラブ・サークル」を評価するようになったことが変化の内実であることが読みとれる。

一九九四年に株式会社リクルートが発表した「在学生による大学別満足調査」の結果は、全体的満足度において一橋大学が対象校中で第四位、国立大学の中では第一位にランクされたことを示している。個別の項目の中で

図3-2 「幅広い知識」への回答の変化

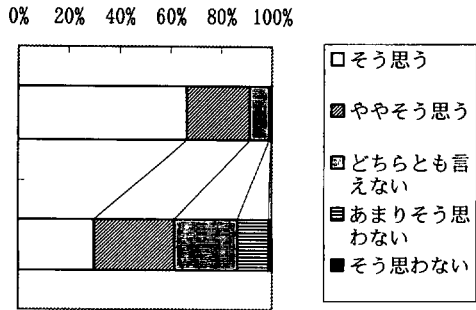
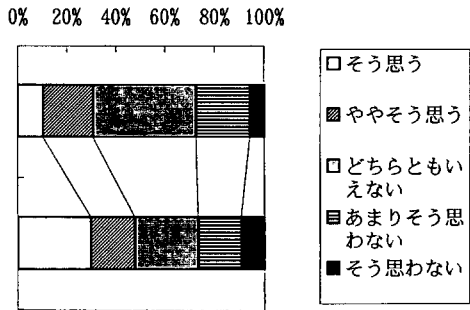


図3-3 「クラブの充実」への回答の変化



は「教授陣が専門分野で社会的評価を受けている」のみが第一位であり、他にも「少人数・ゼミ形式の授業が受けられる」等の「教育・授業」に関する評価項目でも順位は高かった。「校風」に関する六項目の中でも、「アカデミックな」の評価順位が対象校中第二位と高かった。しかし、これらは他大学と比較された場合の相対的位置であって、在学生が実質的に高く評価している点は、

も第二位の評価であった。ところで、社会学部の新設科目である「社会研究入門Ⅰ」を受講したかどうかによって、一橋大学に関する評価に差は認められただろうか。受講生と非受講生とで比較してみたところ、第二回調査の評定の平均値に有意な差のあった項目は一つもなかった。他方、第一回から第二回調査への変化値に両者間で差がないかどうか検討し

その調査で「学生生活(環境)」「人的交流」と分類された評価項目であろう。ここの因子分析結果で、「校風」の項目が「学問・勉強」の因子をほとんど代表することがなく、「社会性」を代表するもの一つであったことが、それを示唆している。社会学部学生がとらえている一橋大学の「校風」の中味は、アカデミズムに関わる点ではなく、社会性因子を構成する他の項目に代表される点なのである。リクルート調査でも、「クラブ・サークル活動が楽しめる」「OB・OGとの交流ができる」の項目では、いずれ

てみると、「自由に勉強」の項目で有意な差が認められた ($t(135.5) = 2.36$ $p < .03$)。これは、いずれも否定的方向に評価は変化したが、受講生の方が ($d = .72$) 非受講生 ($d = .72$) よりもその変化値は小さかったというものである。この点からは、「入門I」の受講が学問・勉強の側面で望ましい影響を及ぼしたことを読みとれるが、その影響は非常に弱いものにはすぎなかっただろう。むしろ、第一回調査の時点でこの授業の受講・非受講による大学評価の差異が認められた。「やってみたい学問ができる」「よい先生にめぐりあえる」「校風が自分にあっている」の3項目で、受講生は非受講生よりも高い評価を大学に与えていたのであった(順に、 $M = 4.63$ vs 4.40 $t(166) = 2.10$ $p < .04$; $M = 4.31$ vs 4.04 $t(166) = 2.25$ $p < .03$; $M = 3.89$ vs 3.58 $t(166) = 2.06$ $p < .05$)。これらの結果は、大学に高い期待を抱いて入学してきた動機づけの強い新入生が、「入門I」を受講しやすかったことを示していると解釈される。

4 社会学部イメージとその変化

社会学部イメージは一六項目の単極四段階形容詞尺度

で測定した。これを因子分析してみると、第一回調査データからは五因子が、第二回調査からは四因子が抽出された。第二回の分析結果の方が因子の解釈もしやすく、まとまりある認知構造を反映していると考えられ、それを表4-1に示した。

第一因子は「頑迷・老朽性」とでも呼べるもので、負荷の高い六つの項目は「時代遅れだ」「息苦しい」といったように、いずれも否定的な内容であった。もちろん、これら項目の評定値が高かったというわけではなく、個人間で分散が認められたということである。図4-1に見られるように、評定の平均値はいずれもかなり低いもので、「あてはまらない」方向でイメージされていた。

第二因子は「自由だ」「暖かい」等に負荷の高いもので、「明朗潤達性」と名づけることにした。この項目の中の「自由だ」が、二回の調査とも、社会学部のイメージに最も当てはまるとされたものである。第三因子は「学問・伝統性」、第四因子は「政治・急進性」をそれぞれ意味しているような項目を中心に構成されていた。

入学後半年間の変化を検討すると、因子全体としてイメージが一定の変化を遂げたものは「学問・伝統性」だ

表4-1 社会学部イメージに関する質問項目と因子分析結果*

項目 \ 因子	「頑迷性」	「明朗性」	「学問性」	「政治性」
(9) 時代遅れだ	811	-.153	0.80	-.014
(4) 息苦しい	806	-.158	229	.125
(6) つまらない	.706	-.114	-.086	0.11
(11) 理解不能だ	.633	.342	-.344	.060
(14) 権威主義的だ	607	-.207	.226	.344
(2) 硬い	.562	-.301	.541	0.49
(8) 自由だ	-.093	.662	187	-.060
(15) 暖かい	-.077	.641	.159	.006
(5) おしゃれだ	-.195	.565	-.161	.313
(1) 明るい	-.426	.486	-.112	.057
(13) 勤勉だ	.096	-.032	.734	-.003
(3) 由緒正しい	-.050	.174	.703	.217
(10) アカデミックだ	-.078	.406	.644	-.062
(12) 政治的だ	177	-.053	022	.848
(7) ラディカルだ	-.036	.423	.203	.496
(16) 空想的だ**	.474	.470	-.039	-.251
寄与率	24.0%	15.3%	10.5%	7.4%

*1 表中の数字は因子負荷量

*2 各項目の前の数字は調査用紙上での質問の順番

*3 特定の因子を代表しておらず、その他の項目と解釈した

けであり、項目得点の合計点は否定的方向に変化した
 (M=7.09 vs 6.01 t(89) = 5.46 p<.001)。個々の項目単位
 でも否定的方向への評価の変化はすべて高度に有意であ
 り、入学当初よりもより「勤勉で」なく(M=1.98 vs
 1.57 t(165) = 5.94 p<.001)、「より」アカデミックで」な

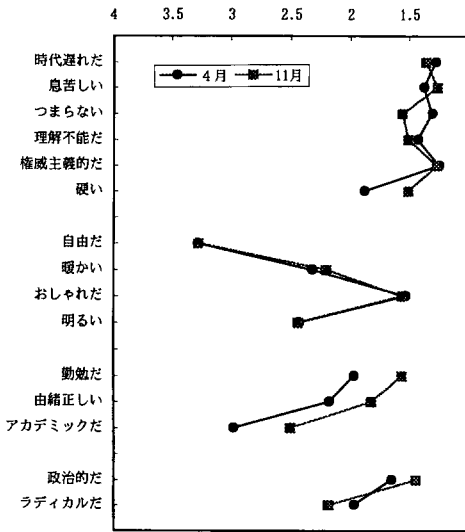
く(M=2.99 vs 2.51 t(165) = 7.15 p<.001)、「より」由緒
 正しく」なく(M=2.19 vs 1.83 t(166) = 4.61 p<.001)
 ように社会学部のイメージは変化したのである。

他の因子では全体として一定方向への変化を示したも
 のはなかったが、個々の項目単位で見ると有意な変化が
 認められた。まず、「つまらない」というイメージは、
 「あてはまらない」ものから「ややあてはまる」方向へ
 変化を示した(M=1.31 vs 1.56 t(166) = 4.21 p<.001)。
 同じ「頑迷・老朽性」に分類された項目でも「硬い」と
 いうイメージは、むしろ「あてはまらない」方向に変化
 した(M=1.89 vs 1.52 t(166) = 5.53 p<.001)。「政治・
 急進性」の二項目も同様に反対方向への変化を示した。
 より「政治的でない」方向にイメージが変わった(M=1.66
 vs 1.45 t(165) = 3.25 p<.01)と同時に、「より」ラディ
 カルで」あることがあてはまると評定されるようになったのである
 (M=1.98 vs 2.19 t(165) = 2.86 p<.01)。

それにしてもイメージ得点の平均値そのものは、一橋
 大学社会学部が一貫して「自由で」「息苦しく」なく
 「権威主義的でない」「時代遅れで」もないものと強く
 イメージされていたことを示している。概して、好意的

(33) 社会学部のイメージは入学後半年でどう変わったのか

図4-1 社会学部イメージとその変化



イメージが抱かれていたのである。

なお「社会研究入門Ⅰ」の受講生と非受講生別にイメージ評定とその変化を検討しても、統計的に有意な違いはほとんど認められなかった。唯一、「理解不能だ」のイメージが受講生のみで「あてはまる」方向へ変化し ($M=1.41$ vs 1.60 $t(89)=2.15$ $p<0.04$)、非受講生には有意な変化は認められなかった ($M=1.45$ vs 1.39 $t(1)$)。両者の変化量の差を検定しても、一定の傾向が認められた

($M=1.19$ vs 0.5 $t(164)=1.95$ $p<0.06$)。

この結果は、「入門Ⅰ」の授業が、学生の学部イメージをむしろ混乱させる方向に効果をもったと解釈できる。しかし、評定値は「ややあてはまらない」と「全くあてはまらない」の間で変化していて、単純で一面的理解を揺さぶる方向の望ましい影響を及ぼした解釈できないこともない。いずれにしても、学部イメージを大きく変化させるような強い影響は一切及ぼしていなかった。

5 興味ある学問、将来専攻したい学問

この調査では二七の選択肢を呈示して、興味のある学問分野について複数無制限の回答を求めた。選択肢は一橋大学社会学部で専攻できる一五の分野と、商学部、経済学部で専攻できると考えられる七つの学問分野(経営学、統計学、会計学、マーケティング、経済学、経済史)、法学、自然科学系の三つの研究分野(コンピュータ科学、環境科学、生命科学)、語学および文学から構成した(図5-1a、b参照)。

その結果を図5-1a(学部内一五科目区分)、図5-1b(その他の分野)にまとめた。この図は学問分野

図5-1b 興味ある学問分野(その他)

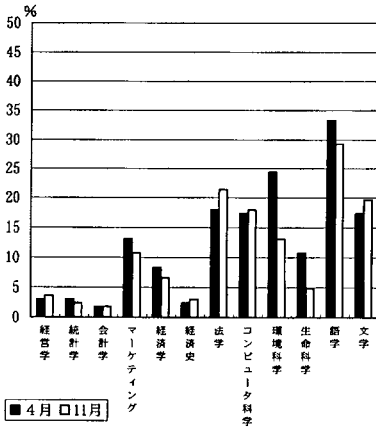
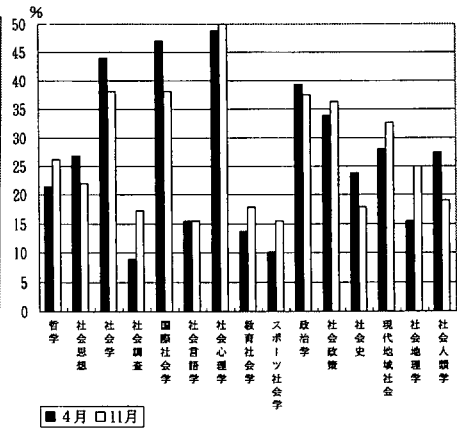


図5-1a 興味ある学問分野
(社会学部の科目区分)



ごとの延べ選択率を、四月および一二月の調査別に棒グラフで示したものである。

新入学生が最も興味をもっていた分野は、二回の調査を通じて「社会心理学」であった。しかし、この調査の主体(本論文の第一著者)が「社会心理学研究室」所属であることを、調査時点で明記していたことを割り引いて考える必要がある。他に学生が興味を示した比率の高かった学問分野は、「社会学」「国際社会学」「政治学」「社会政策」等であった。

第一回調査から第二回調査への変化を調べてみると、興味比率の増加が認められたのは「社会調査」(マックネマーの有意変化の検定で、 $\chi^2(1) = 6.13, p < .05$)と「社会地理学」($\chi^2(1) = 8.00, p < .01$)であった。逆に興味比率が減少したのは「国際社会学」($\chi^2(1) = 4.41, p < .05$)と「社会人類学」($\chi^2(1) = 5.79, p < .05$)であった。しかしいずれの変化も10%を越えるものではなかった。

これらの変化が「社会研究入門I」の受講と関わっているかどうかは、興味深い問題であろう。そこで表5-1のようにいくつかの学問分野に関して、受講生・非受講生別に二調査時点での興味比率の表を作成した。

表 5-1 興味比率の受講別変化*1

	受講生(n=90)		非受講生(n=78)	
	4月	11月	4月	11月
社会学	53.3	36.7	33.0	39.7
社会調査	13.3	24.4	3.8	9.0
国際社会学	46.7	36.7	47.4	39.7
社会地理学	18.9	34.4	11.5	14.1
社会人類学	33.3	21.1	20.5	16.7

*1 数字は受講生、非受講生各々の全員に対する回答比率(%)

他方、「社会学」への興味の減少と「社会調査」への増加は、受講生に特有のものであっただろう(受講生に関しては順に $\chi^2(1) = 6.82, p < 0.1$, $\chi^2(1) = 4.17, p < 0.05$)。しかしこの変化の原因の解釈は簡単ではない。まず、「入門I」の授業内では「社会学」と「社会調査」は同一の担当者が一回の(合同の)講義

この表からまず、「国際社会学」への興味の減少は、受講・非受講に関わらない一般的な傾向であったことがわかる。もちろん、「減少」といっても特に高かった比率が一定の高さに落ち着いたことを示しているものである。受講生別に変化を検定してみると、いずれの群でも有意には達しなかった。

をしただけであるので、その講義が原因である可能性は少ない。また、「社会学」での「減少」は、受講生の四月時点での特に高い興味比率が一定の高さに落ち着いたものと解釈可能である。もちろん、受講経験全体の何らかの要因がこれらの変化を生み出したとも解釈可能である。受講生特有の他の要因、例えば彼らだけが受講していた比率の高い特定の授業科目の影響も考えられる。

「社会地理学」への興味の増大と「社会人類学」への興味の減少傾向も、同様に多くの要因が影響していた可能性がある。しかし、「社会地理学」への興味の増大は受講生のみで有意であり($\chi^2(1) = 8.91, p < 0.1$)、この授業内での当該科目区分の講義にも一因があったことを示唆している。これと同じ傾向は次の「将来専攻したい学問領域」への回答結果にも認められる。他方、「社会人類学」の受講生における興味比率の減少は有意水準に達せず($\chi^2(1) = 3.52, ns$)、「入門I」での講義との関連の可能性は小さいだろう。

「将来専攻したい学問領域、テーマ」の質問へは、自由に複数の回答を記述させた。その記述内容を、「興味ある学問分野」の選択肢と同様なカテゴリへ、一人の

表5-2 将来専攻したい学問領域*1

	4月(第1回調査)			11月(第2回調査)		
	全体	受講生	経歴	全体	受講生	経歴
哲学・社会思想	7	4	3	6	3	3
社会学・社会調査・社会言語学	10	8	2	7	10	7
国際社会学	23	12	11	13	7	6
社会心理学	11	7	4	14	8	6
教育社会学・スポーツ社会学	2	1	1	3	2	1
政治学	10	5	5	12	6	6
社会政策	12	4	8	7	2	5
社会史	6	3	3	6	2	4
現代地域文化(現代社会)	3	1	2	3	2	1
社会地理学	4	1	3	5	4	1
社会人類学	1	0	1	1	1	0
商学・経済学関係	0	0	0	3	0	3
法学	1	0	1	3	3	0
自然科学関係	7	3	4	1	1	0
語学・文学	2	1	1	1	0	1
マスコミ関係	13	8	5	7	4	3
その他・分類不能	10	5	5	41	21	20
未記入	46	27	19	25	14	11

*1 数字は人数

判定者が分類した。分類の信頼性は求めていない。ここでは複数の回答のうち第一番目に記入された回答のみを取り上げて、各カテゴリー別の人数を表5-2にした。この表のカテゴリーは「興味のある学問分野」の区分を基礎にしているが、関連の深いもの同士をまとめているところもある。また、全員の結果とともに、受講

生・非受講生別の内訳を調査時点ごとにも示した。

各カテゴリーの人数が少なくはつきりした傾向は読みとりにくいですが、まず「興味のある学問分野」とある程度対応した「将来の専攻」の希望が読みとれる。半年間の変化で興味深い点は、第二回調査では未記入の者が減っているが、「その他・分類不能」に含められた回答が激増したことである。これは入学後半年で将来の専攻の希望がかなり明確になって、必ずしも社会学部の専攻区分にはびったりとは当てはまらないものとなってしまったことを意味するのかもしれない。表中の「マスコミ関係」の回答は、もし既存の分野に当てはめるとすれば「社会心理学」が最も適当であるが、それとは別に独立させることが可能であった。こういったカテゴリーで少数のみが専攻を希望するものが増えていったのである。

6 まとめ

本論文では一橋大学社会学部新入生が大学、学部にとんなイメージを持って入学してきたか、またどんな学問分野に興味を持ち専攻を希望していたかを、調査データに基づき明らかにした。それが半年を経過した後には

どのように変化を遂げたのかもデータを基に呈示した。

一橋大学、社会学部に関する評価やイメージは、概して好意的なものであった。しかし、入学時点でかなり肯定的だった評価・イメージが、半年後には否定的方向に変化するという問題が示された。特に社会学部イメージの学問・勉強に関する因子における大幅な否定的方向への変化は、心にとどめておくべき問題かもしれない。もちろん、それでもほとんどの変化は決して非好意的な側面に評価が逆転したのではなく、受容可能な範囲での変化であった。

新入生の学問分野への興味や専攻の希望は、非常に多様であった。もちろん、その想定している学問分野の認識は未発達のものであろう。必要なことはそれらの興味・関心・希望に適切に対応できるカリキュラム、教育システムを構築、維持できるよう努めることであろう。

新設科目の教育効果の検討結果は、本論文の範囲内では不明確なものであった。わずかに期待したような結果を示すデータは得られているものの、全体としては、めざましい効果が得られたとは決していえない。また、受講生と非受講生の系統的差異に関する事前の考慮が不足

していた点など、今回の検討方法そのものにも反省が必要である。しかし、本研究は大学の教育活動に内在して実施された自己評価の数少ない試みの一つであり、今後の分析を通じて、その価値を見出ししていきたい。

(1) 本論文の基となった調査は、平成六・七年度の文部省カリキュラム改革調査研究経費の助成を得て実施された。実施に協力された一橋大学社会学部社会心理学研究室(当時)の松尾ひとみ、同研究室の太田恵子、社会学研究科大学院生の山下玲子、社会学部学生の千吉良武雅、同学生(当時)の添田ゆかりの諸氏に感謝する。

(2) 株式会社リクルート教育機関広報部『大学満足度調査』(在学生による大学評価) 一九九四年2月。この調査結果は、進学リクルートブック特別編集『リクルートムック 大学選び新基準A-Z』(一九九四年春号)(株)リクルート一九九四年5月の各記事の基礎となっている。

(3) 四月時点で受講生と非受講生との間には興味比率に有意な差が認められたが($\chi^2(1) = 6.78, p < 0.01$)、11月時点ではその差は消失していた($\chi^2(1)$)。

(一橋大学助教授)

(一橋大学大学院修士課程)